フランス人現代舞踊家ジョルジュ・ポミエス（Georges Pomiès, 1902-1933）と「舞踊批評」

北原まり子

1902 年パリ生まれのジョルジュ・ポミエス（Georges Pomiès）は、歯科学校に学び、1924 年のミュージックホール寄席芸人コンクールでの優勝を契機に、シガール座、アルハンブラ座、オランピア座、アンピール座、パラス座などに立て続けに出演し名声を得た。1926 年に「ダンサー」に転向、ミュージックホールの出演を続けながら、シャンゼリゼ劇場、アトリエ座、モンパルナス劇場等でリザ・ダンカンらと「リサイタル」を開く。1930 年前後からはフランス労働者演劇連盟（FTOF）から派生した革命志向の演劇集団「プレミス」（のち「10 月」）の主要メンバーとなり、革命的作家芸術家協会（AEAR）のスポーツ部門の責任者にもなった。ジャン・ルノワール監督『のらくら兵』（1928）主演を契機に映画俳優としても活動、1933 年に 31 歳で急逝したが、多様な領域で活躍した興味深い舞踊家である。当時の評判もさることながら、戦後のフランス現代舞踊家ジャクリーヌ・ロバンソン（1922-2000）やドミニク・デュピュイ（1930-）らも 1990 年代にこのダンサーに関心を寄せており、舞踊史家イザベル・ロネも社会運動との関係でポミエスに注目している。

とはいえ、モダンダンサーとしてのポミエスの舞踊そのものについて明らかにすることは、容易ではない。踊りは独学で、芸風は当時の寄席芸として馴染みのある「物真似（imitation）」を中心としており、ハリー・ピルサーやモリス・シュヴァリエといったミュージックホールのスター達の模倣から始まり、《テニス》《ボクシング》《腕のない男》などのソロ小品を作った。アンドレ・レヴィンソンを含む当時の批評家は、ポミエスのそうした踊りの中に一般的な物真似芸とは異なる「オリジナリティ」を見出し、類い希な舞踊家としてその芸術を賞讃した。

本発表では、レヴィンソンがポミエスの舞踊様式を「踊りによる批評（critique dansée）」と名付けた点に注目し、ポミエスが 1930 年に雑誌連載したダンサー批評の文章と付き合わせてその実践を検討する。ダンサーがダンサーをみる眼差しとその感受性、踊りによる舞踊批評というテーマは、今日のフランスの舞踊学でまさに注目されているが、ポミエスの実践は 20 世紀前半にそれがどのように実践されたかを探る上で示唆に富んでいる。